

☆わたしの意見

ポートアイランド に英知と努力の 結集を

砂野 仁

(川崎重工K.K.会長
神戸商工会議所会頭)



貿易センタービル一六階の神戸商工会議所会頭室から眼下に見降すポートアイランドの建設工事は、日に日に、進行しつつある。その利用構想なり、基本設計なりについては、既に策定されているが、この人工島の完成した姿と神戸市の発展と結びつけて考えることは、楽しい。

もともとポートアイランドは、本来、港湾輸送の変革期に対処するための着想から出発したものであるが、更に未来の都市のあるべき姿の実現を期待したい。神戸経済界の今日の問題点は、生産機能の地方分散、中枢管理機能の東京・大阪への転出という傾向の中にある。これを打開するには、流通機能の集積とこれに関連した未来を先取りするアイデアの創造性にかかっているように思う。これらを存分にかつ新たに発揮しうる場がポートアイランドに外ならないのではないか。その意味でポートアイランドは、新生神戸の実験場とも見られる。ことに、ポートアイランド沖に関西新国際空港が建設された場合、まさに神戸の飛躍台となろう。

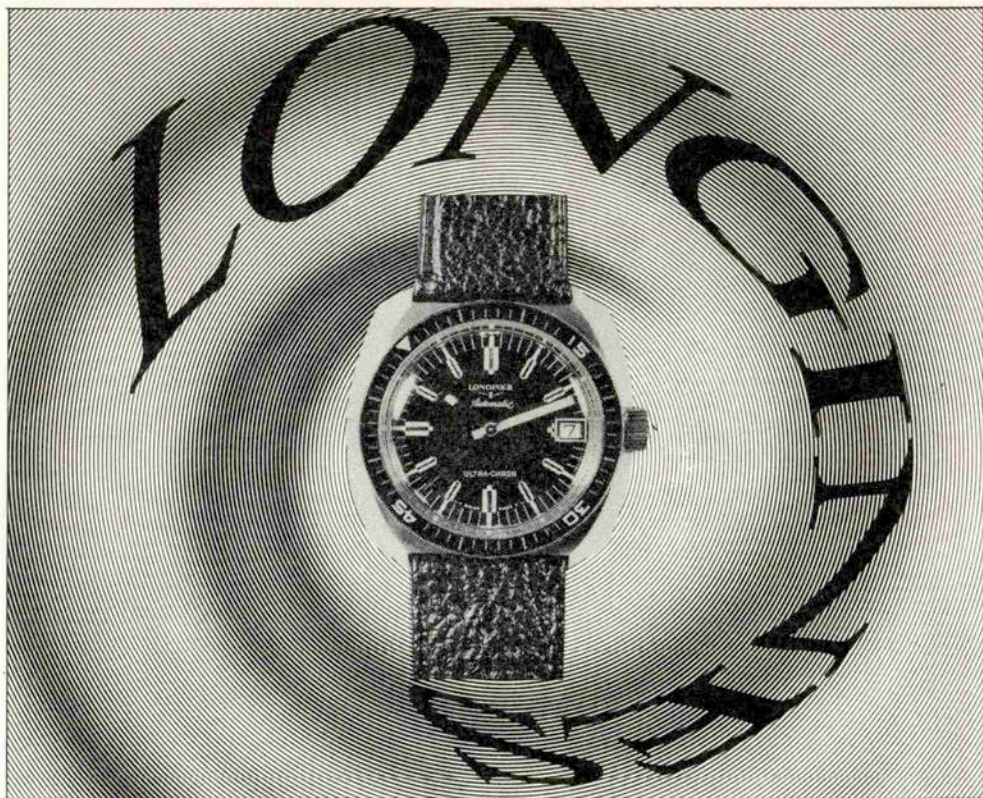
とはいうもののこの実験は、必ずしも容易な道ではない。いかにして神戸の国際流通拠点としての性格を高めるか、例えばコンテナ化を中心とする貨物輸送システムの造成、国際空港と旅客輸送システムとの調和等即座に答を出しえない課題が横たわっている。

この解決、アイデアの創造が、神戸の明日を開く鍵となる。このためには、多くの人々の英知と努力が結集されてゆくべきであり、その経験が更に、大きな発展への花となり、果実となろう。

実は昨年、私も経済人で策定した神戸経済のビジョンの中で、世界的都市づくり、頭脳都市づくり、人間都市づくりを提唱したが、ポートアイランドの建設は、これらの三面を含むものであり、ポートアイランド建設関係各位の一層のご努力に、期待してやまない次第である。

最高のものを厳選する人に

ロンジン



ロンジン・ダイバー・ウォッチ (高振動自動巻SS 20気圧防水 カレンダー付) ¥ 84,000 円

スイスの伝統にはぐくまれた
アートの感覚と最新のメカニ
ズムが、この斬新なデザイン
を生みだしました。
世界のエリートに信頼され、

最高のものを厳選する人々
に愛用されてきました。現代
を生きるあなたにふさわしい
時計を、ロンジンの中から
お選びください。



LONGINES

特約店



美田時計店

元町店・元町三丁目 TEL33-1798

三宮店・さんちかファンシー・タウン TEL33-8798

随想三題



神戸まつり「なんどいや」のパレード

笑いつづけた

卑弥呼

荻野由美子

〈グループなんどいや〉



「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにや損々」お祭りがあ
る度に、聞かれることばですが、
文字通り私には踊る阿呆の神戸祭
りであった。

グループ「なんどいや」の一員
になるまではお祭りに参加するこ
となど、夢にも思っていなかった
ことだし、何事につけ、消極的だ
った私にとってこれは画期的なこ
とだったのです。(少し大げさか
な)しかし驚いてばかりではいら

れない。「一体何をすればいいの
か」「あっと驚くような何か面白
いことはないか」みんな顔を合わ
せる度に「何、何、what」そ
して途方に暮れてしまった。そう
して遂に思いついたのが、その
「何か」を誕生させることだと。
そして約二千年前、我が邪馬台国
における人民の救世主、卑弥呼の
誕生となったのです。

さあそれからが大変、衣裳に石
棺に効果に、更にそれらに必要な
予算、これがまた集まらない。何
せ若さだけが売り物の、貧乏所帯
なものですから、特に効果には困
った。あんなに待ち焦がれた卑弥
呼の存在ではあったが、結局卑弥
呼は救いようもなく狂っていたの
ですから、そのために狂った笑い
声を出さなくてはならない。あの
美しき？卑弥呼を演じた三本松氏

など、ビール片手に必死の覚悟で
文字通り気の狂ったように、笑い
続けたのです。

そんな苦勞の甲斐あってか、何
とか私たちの思うようなのが出来
上がりました。さて当日、昨年の
カーニバルの日とは打って変わる
快晴です。いつも見る立場にいた
私が見られる立場になったのです
から、恥ずかしさと同時に、幼い
頃お祭りになると、母にうすく紅
をさしてもらい、緑道を歩く時の
あの笑い出したいような楽しげな
思いが込み上げ、緊張感に胸を締
めつけられました。

ところで街はいっぱいです。「何
か」を待ち望む人々、作り出すそ
うとしている人々、「何か」に胸ふ
くらませ、目をぎらぎらさせてい
ます。特殊な人たちに踊らされた
ものではない。本当の意味の私た
ち市民のお祭りです。行進が始ま
りました。普段歩くことのできな
い自動車様専用の道を裸足で歩き
ました。アスファルトの焼けるよ
うな熱さが、裸足の皮膚から、じ
んじん伝わってきました。

人々は何かを期待しながら食
入るように私たちを見ていまし
た。とにかく、充分とは言えなく
ても、私たちの望む「何か」のひ
とつは、神戸祭りに参加すること
によって実現できたのです。そし
てわずか十二人のグループにもか

かわらず、私たちの呼びかけに、喜んで応じてくれた人たち、そしてひとつのことに熱中したこと、これは素晴らしい「何か」の発見でありました。

これからもこういった輪が大きくなり、それこそ市民全部が参加できるよう、私がいつかミセスとなり母となった時、子供とともに参加できるような、楽しく、そして市民に密接した神戸祭りとして発展していくよう心から期待します。

アテネ村の

日本人

小川淳子

ヘレポター 在ギリシャ



ギリシャ遺跡の写真を撮る日本人

アテネに住む日本人は約六、七十人で、彼らのほとんどは日本商社に働く人々とその家族である。ロンドン、パリ、ニューヨークなどの大都会に比べ、新しい話題となる映画もコンサートもなく、若者たちのデモすらない。何事も起

こらないアテネ市にとって、日本人を最も興奮させたのは、四月六日の国際マラソン優勝である。

その日、マラソンにしては暖かすぎたようだが、ギリシア独特の素晴らしい天気だった。三時半、十四ヶ国参加の八〇人の選手はマラソン村を出発。宇佐見選手はスタート以来ずっとトップだ。そこより四・二kmの地点に、小さな森の中に作られたマラソン碑がある。古代ギリシア紀元前四九〇年に当地で行なわれたペルシアとの戦いで、戦死した兵士たちの墓である。

選手たちはスタート前に手渡されたオリーブの小枝を、その碑の前を走り過ぎる時、碑に投げ捨てるのだ。宇佐見選手は、羊やドンキーの見えるのどかな田園風景をバックに、アスファルト道路をただ一人、長距離ランナーの孤独で走り続けた。

五時四二分一九秒、アテネ・スタジアムはほぼ満員。日本人たちは日の丸を振って大喜び。彼は疲れた様子もなく、スタジアムを手を振りながら一周。カメラを持つ外人記者の「ファンタスティック」の連発が聞こえた。

それより二、三日たって、日本大使の公館で、彼のレセプションが行なわれた。果てしなく広い庭に囲まれた豪華なメゾン、素晴らしいマーブルの床や壁、シャンデリ

ヤの輝く大きな部屋の中のドレスアップした紳士、淑女たち。ハイ・ソサイエティの匂いのするセツトは満点であった。が、ドルチェ・ビータ（甘い生活）とまでいなくても、男性、女性が少しも行き来する気配のないのはおかしなものであった。クレタ島から戻ってくる宇佐美氏を待つ間、奥様方はおしゃべりに余念がない。憧れの「宇佐美様」のお話に、物価や食物の話……。神戸っ子の私にはとてもジョインできる会話ではない。

さて、宇佐美氏が拍手の中で到着。スピーチに続き、優勝カップがまわされ、それに注がれたビールを飲むダークスーツの日本紳士たち。女性に囲まれ黒一点の彼は、照れながら真中のソファに座り記念撮影。

さていよいよお別れ。その時である。商社勤めの一人の中年紳士がタイムニングをみはからって一言「あんた、本当に嬉しいことをアテネでしてくれたわい。あの時はもう感慨無量であった。本当にありがとうをいいたい」ここで皆拍手。そこまではよかった。が次に「またこれで日本製品がよく売れるということですね」皆笑う。そして次に「ギリシア人にとって、日本製品はベストだそうだ。あんたがしてくれたこともベストであったな、ハハハ……」

ギリシアが輸入する日本製品と宇佐見選手マラソン優勝がどのような関係で結ばれてこの会話になったのか、私には理解できないがまさにエコノミック・アニマルを赤裸々に表わした一瞬であった。それに対して宇佐見選手は何の反応も示さず、ただ黙ってスマイルし続けていたことは、さすがであった。

タヒチにて

岡見裕輔

（詩人）



ホノルルから五時間ほどの飛行で、タヒチ島のバベテへ着く。夜の八時すぎ、ようやく暮れずんだ空港におりたち、花で飾ったレイをかけてもらう。東京よりの乗継ぎの長旅と、機内で飲んだ酒の酔いのため、いささか疲れ気味である。そのままホテルへ直行、シャワーを浴び、ベッドへ倒れこんでしまう。

夜中、大鼓の音、それもトーンの高い、速いリズムの響で眼が覚める。タン・タン・タンとたたみこむような強烈な連続音が、このホテルの七階の室まで聞こえてくる。そして、それらのリズム音のほか

は、なにも聞えない。ざわめきもなければ、楽器のメロディーもない。タン・タンあるいは、コン・コンという打楽器の澄き透った音色が伝わってくるだけである。

一瞬、その響が途絶える。暗闇の静けさが残る。ベッドにねたま、耳をすまし、どこかへ墜ちこんでいくような感じに身をゆだねる。と再び激しいリズムが合図にでも応えたように、急に始まる。

なぜか、わたしは、ああ、と思う。南半球、南太平洋のひとつの小島にいまわたしが居るのだということが、単調な、しかし強烈な打楽器の音に照応して、とつぜん浮彫りになったような感じがしたのだ。

あくる朝、ホテルの外庭にあるポリネシア風の野外レストランで昨夜、タヒチアンダンスのショウがあったのだと、聞かされた。プーゲンビル提督という名のこの野外レストランは、椰子の葉でふいたポリネシア風の平屋で、ホテルの七階にまでときそうな大椰子の点在する庭にあり、海がすぐそこに続いている。

観光施設は意識的にポリネシアの風物を取りいれ、たとえば七階建のホテルでも、遠くからでは、まるで木造の巨大な倉庫のように見えるように造られている。しかし、その舞台裏は、ホテル代が一日最低二十ドル、食事も日本並に

高く、まず一日の滞在費は四十ドルはいる。ただ税金とサービス料はまったくなく、この点すがすがしい気分である。

タヒチよりモレーア島へ、小型機で十分間で着く。キャブテン・クックの名にちなんだクック湾の眺めは幻想的で、湾をとりまく奇怪な型をした山々や溪谷から、バリハイの歌声がいまも聞こえてきそうな想いがする。

ホテルは、すべてバンガローで椰子の木立の並ぶ海辺に点在している。

島の連中と砂浜で喋っていた時何気なしに東はどちらの方向かとわたしが訊ねた。一瞬、彼らはきょとんとした顔つきになった。きみは方角のことを言ったのか、と一人が問いかえた。そうだ、北とか南とか……と言いかけて、しまったと気がついた。こんな小さな島に、東西南北がどうして必要なものか。愚問であった。

太陽は、だいたいあちらの方から昇り、あちらの方へ沈んでいくようだ。ということばは、あちらが東で、その反対が西といえはいいのだろうか、とその大変親切な男は答えてくれた。

その時、太陽が、空が、海が、そして島をとりまいている珊瑚礁までが、一度にどっと哄笑したようであった。

最近、日本語の乱れが目につく。若い人たちの電話のやりとりを聞いていると、九九パーセントまでが「から」というべきところを「ので」といつている。「ので」というのは客観的な事実を伝達する場合に使われることばであって、自己の意志を伝えたり、主観をのべようとするときは「から」でなければならぬのに、この二

で」で片づけているのは、現代っ子の性格の弱さ、あるいは無性格ぶりがおのづから反映しているのではないだろうか。

これは一例にすぎないが、このような風潮が広がっていると、んだんに日本語の正しい意味が曲げられ、日本のことばの固有の美しさまでが失われていくのでは……ということから、神戸周辺の音楽教授、国語学者、学生およびアマチュア音楽愛好者らが集って、

会 波 神 戸 小 寺 巖

(神戸波の会々長)



神戸国際会館で開かれた「神戸波の会」サロン

「美しい日本のことばを研究し、音楽などを通じて、その普及をはかる」との趣旨で「神戸波の会」を設立した。きわめて地味な活動であるが二年以上も続いている。毎月、研究会を開いているのが、あたかも大学の教室を町へ移したような感じで、いつも充実した話が聞けるので楽しい。少しも堅苦しいところがなく、誰にでも門戸が開放されている気楽な集まりである。また時々「サロン」の名で、話しのほかに会員の歌唱を聴いたりもしているが、当地方では珍しいユニークな会だと思っている。

つが混同されている。谷崎潤一郎は「細雪」のなかで、気の弱い末娘の話すことばだけは、他の姉たちとちがえて、「から」というべきところを全部「ので」で押し通して、末娘の性格の弱さを読者に印象づけようと、巧みに使い分けしている。さすがに文豪らしい細かい神経の配りかたである。

最近の若者たちがすべてを「の

今日までに講師としてお願いしたのは、東京からは国語学の金田

一春彦・作曲の中田喜直・小山清茂・歌の四家文字などの著名な先生たちのほか、当地方では国語学の遠藤嘉基博士・大阪音大の浦山弘之教授・神戸大学の中村茂隆助教授らが熱心に面倒を見てくださっている。

月例研究会での話題の一、二を紹介すると、遠藤先生は——わが国の学校教育では、視覚文字によって視覚言語を使うように教えているが、この状態を続けている限りは世界文化におくれを取らないでいることはむずかしい……、やがて聴覚文化の国際的競争時代に入ると、警告しておられる。

また中村先生は——漢音は聞いただけでは意味がわかり難く、文字を見てはじめてわかるものが多い。一時は全国民に愛唱された「愛国行進曲」がその適例であり、また、ことばとメロディが密着していない例としては「荒城の月」などがある……。感覚的に意味が受けとれる詩・歌がほんとうの歌といえるのではないだろうか……。その良い例としては「私たちの花」「雪の降る町を」などがある。と、やはり聴覚文化の重要性を指摘しておられるが、傾聴すべき意見だと思ふ。

(七ページ参照)

★連絡先 小寺 巖 灘区赤松町2の1

潜り戸を入ると
家族的な雰囲気
味わえる和風料理



和風季節料理

花

さんプラザ地階 TEL33-0087

営業時間 A.M.10:00~P.M.9:00

雪やまにも似た
大和屋シャツの
サマータッチ!

御中元 御贈答に

●お仕立券付シャツを

舶来地(スイス中心)¥5,300より

国産地 ¥3,500より



紳士シャツの店

大和屋シャツ

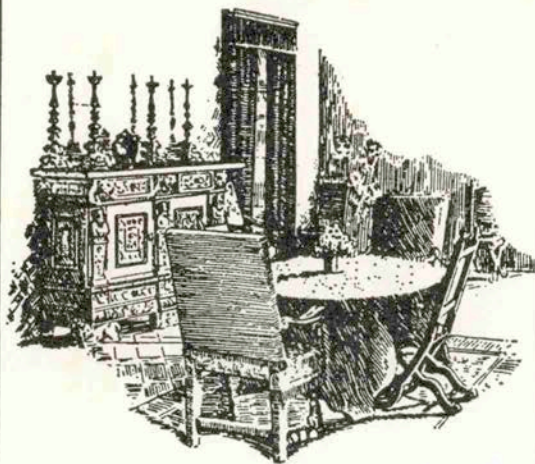
■国際店☆カスタムシャツのアトリエ(月曜定休)

神戸国際会館1階 TEL25-0220 AM10時~PM7時

■三宮店☆紳士シャツ専門店(月曜定休)

三宮センター街 TEL33-6956 AM10時~PM8時

家具・室内装飾・工芸品



永田良介商店

神戸市生田区三宮町3丁目大丸前 TEL 神戸(39)3737(代表)
 東京店・東急百貨店 日本橋店内6階 TEL 03(211)0511
 本店(渋谷)7階 TEL 03(462)3180

新しく、ドイツの古城を
 デザインしました。

●バウムクーヘン



ドイツ菓子

Fachreim's

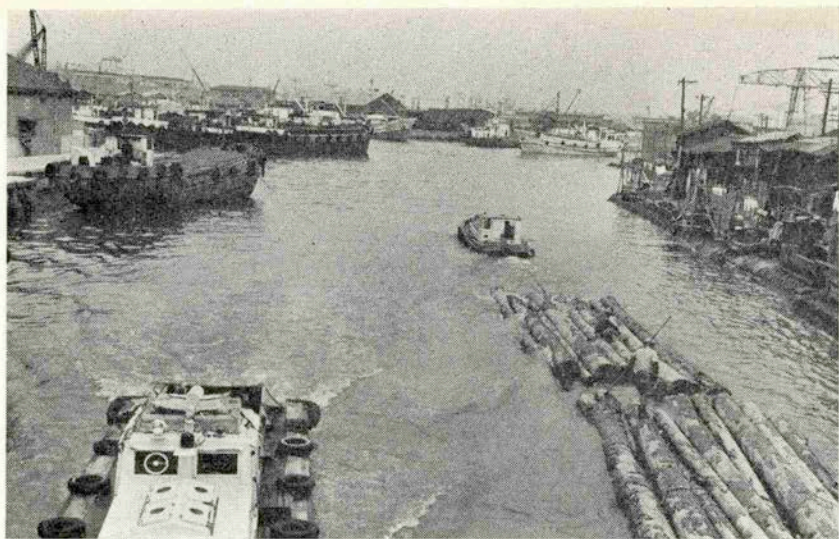
ユーハイム

本社 三宮生田神社前 TEL(33)1694
 三宮店 三宮大丸前市電筋 TEL(33)2101
 さんちか店 三宮地下街スイーツタウン内 TEL(39)3539
 心斎橋店 大阪心斎橋筋大丸前 TEL(252)0925
 阪急三番街店 梅田阪急三番街地下2階 TEL(372)8823

□れんさいずいそう 1

兵庫哀愁

林田重五郎 (随筆家・写真家)



新川橋を木材を引いた舟がゆく

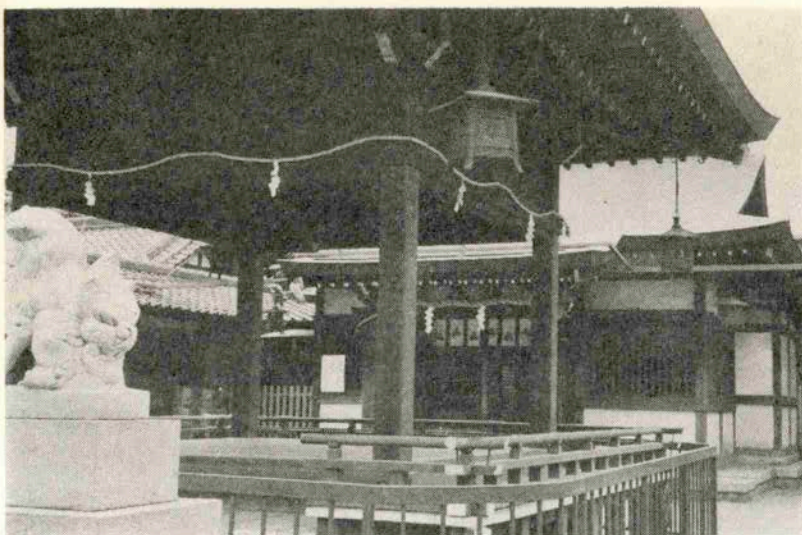
神戸っ子らしい、もっとも神戸っ子らしい神戸っ子というたれであろうか。詩の竹中郁さん、絵の小磯良平さん……そしていまは亡くなった版画の川西英さん。兵庫東出町の川西さんのお宅へ始めて伺ったのが昭和十年の暮であるから、ずいぶん昔の話になる。磨きあげた格子戸の美しい、古風な構えに驚いた。

考えて見ると神戸は新しいが、その一部の兵庫の町やミナトは非常に古い。四世紀ごろに大陸からの使節は、このムコノミナトから出入りしたし八世紀には行基がオオワダの泊を設け、十二世紀には平清盛が経が島を埋め立てたと本には書いてある。江戸時代は廻船問屋の町である。

川西さんも本名は善右衛門、数隻の船を持っていた淡路屋善右衛門七代目の当主であり、住居に江戸時代の香りがあふれているのは当然である。入口をくぐると広い土間がカギ型になって奥へ続いていった。ところがお部屋に入ってアツと驚いたその数年前、日本を訪れて評判が高かったドイツのハーゲンベック・サーカスの大きなポスターが掲げている。蒙古刀がつつてある。西欧の古代のランプが飾つてある。フランス人形もある。当時の流行語でいうと、満室、これエキゾティシズム

である。神戸のなかの最も古い町のなかから、最もエキゾティックな芸術が生まれる、その対照の妙が判ったような気がした。そういうと竹中さん小磯さんも、たしか御出身は旧家のはずである。川西さんの風貌は本居宣長をしのばせる。高雅である。言葉はきつすいの兵庫弁。なぜ版画に進まれたかのお話は面白かった。県商に在学中は絵に凝った、家は先祖代々の問屋である。後継者が画家になっては困る。商人の方へ進めと反対されたりしい。

「それで相生橋の近くにあった喫茶店ブラジルを借って、最後のつもりの個展を開いた。絵とも



柳原のえびすさんの拝殿は静けさの中にあった。

これでお別れやと決心して……ところが、逆に新しい絵の友人ができたりして、かえって深入りするようになってしまった」

ある年、年賀状を版画ですった。なかなかオモロイ、本式に始めて国展に出品したのが昭和二年である。

「絵だと数も多いから入選は無理だったのだから、版画は珍しいし変っていたからよかったのだろう」

たいへんなケンソンの言葉だった。ケンソンといえ、版画の技術についても「線を抜いて、色だけで物の形を出す新しさを思いついただけ……」とのことだったが、なかなかそれだけではない。

素人の私が見ても、まず色が鮮烈である。特に赤と緑がなんともいえない美しさである。現在まで諸家の版画をたくさん見て来たが、川西さんほど美しい赤と緑を使った例は少い。絵具にはきつと大変な苦心をされたことと思うが、秘術を問いただすのは悪い気がして、質問をひかえた。今にして思えば御苦心の一、二を伺っておいた方がよかったようにも思える。

題材が、さきにも記した通りエキゾティックである。サーカスがお好きで、ハーゲンベックのは十数ページの画集になったが、室内のツボにしても風景にしても異国情緒があふれている。風景という、そのとき「神戸百景」（戦後に神港新聞に連載された大きな画集になったのは第二次の百景で、これは第一次の作品）が五十数枚まで進行しているときであった。神戸の町の風景が川西さんの心を引きつけたのはいうまでもない。川西さん



東出町の辻地蔵は兵庫のむかしを思わせる。

を見たとき、これは昔の川西さんの世界だと痛感した。川西さんがおられたらどんなケンラン豪華な作品になったことか。全く惜しいことであった御令息の祐三郎さんが、版画の方も後を継いでおられる。御成功を祈りたい。

旧家に多いことだが、川西さんは東出町の郵便局長をしておられた。このあたり幸い戦災を免れたので、いま歩いても土蔵のある家や、中二階の家など、昔の兵庫が残っている。

四つ辻には地蔵さんが祭られているし、船具店などの看板が見えるのも、廻船問屋が多かった時代をしのばせる。



の芸術は神戸であったからこそ生まれたのだし、神戸の美しさは川西さんの眼によって新しく発見されたともいえよう。山手からのミナトの風景、これなどわれわれの目にいまもしみついている。

「絵は一筆ごとに出来上ってゆくのが見えるが、版画は刷り上げるまで結果がわからない。だから刷り上げるときの興奮は大きい。刷り上げたのを額に入れて、枕もとに置き、三晩くらい、ためつすがめつ楽しむ」

川西さんの作品にはどの一枚をとっても愛情があふれている。晩年には京都の石庭など淡い色のしゅい作品が多かったようであるが、去年万国博

いまの兵庫区は山のかなたの有馬まで拡がって広大なものだが、戦前は湊西、湊東、湊など各区に別かれ、警察署も国鉄以南だけが兵庫署であった松原通にあったこの警察を二カ年受持ったが、その関係で柳原の検番近くに下宿をしたことがある祖母さんとその娘さんとお孫さんの女系三代三人のみの家だったが、警察から帰ると目の美しい十二、三歳のお孫さんが、お茶をささげて運んでくれた。すぐ向いからは三昧の音が聞える……。

あれはどの辺だったろうか。柳原の天神さん、えびすさんは見つかったが、広い大きな道が作られ、その上を高速が走っていて、古い花街を探しようもない。兵庫駅の南は戦後激変したのである昭和七年生活苦のためか愛児を三人、レールと火と水で別々に死なせた事件があったが、そのうちの水の、新川あたりを歩くと、ここは昔のままだった。新川橋の下を木材を引いて昔の通りに船が過ぎていった。

★インタビュー／高井貞二画伯神戸へ

KOBE NEW YORK



京、大阪の高島屋で個展を開いた。そして、神戸では中西勝さんがニューヨーク在中の頃の先輩後輩の間柄。高井さんも、神戸の諏訪山小学校出身とあって三宮の『蛸の壺』へ姿をみせ灘の生一本を飲みながら、神戸・ニューヨークの古き話、新しき話に花が咲いた。

★神戸での生活がぼくの人生を左右してる

「ぼくが生れたのは北野町三丁目北野天神の下で、北野小学校の前を通って諏訪山小学校へかよってたんです。となりがジョンだったりメリーだったり、外人の子供とトンボ取りをしていた。諏訪山小学校は当時木造で、校長は乗杉先生で教わったのは久留米木先生。元気のいいので有名でしたね。平尾先生というとてもきれいな先生も憶えている。

★世界を相手の戦い

「ニューヨークには世界中から集まった絵描きが約八万人いる。ギャラリーは三〇〇軒、ABCDのクラスがあるとしてAクラスのギャラリーは十五ぐらい。その一つが十五人の絵描きと契約するから、その四五〇人中に入って行こうと思うと世界を相手の戦いでね。センチメンタルなことというとなつてしょうがない。将棋や相撲の世界と一緒に。絶えず新しいものをクリエートしてゆかんとスグ無名になつてしまう」

と語る高井貞二さんは、一九五四年日本脱出。ニューヨークに住みつき作家活動を持続十七年。『NOWがあるニューヨーク』の題になつて若々しいエネルギーをぶつけている国際画家。今春三月、十二年ぶりに帰国。東

白い石のTOR HOTELと英語で書いてある。あの頃の神戸はなごやかでしたね。ぼくが、ニューヨークに憧れたのも子供の頃、外人の友達の家でサンドイッチと一緒に食べたりしていた神戸での生活が、潜在意識として持っていたんだろうな、中年以後のぼくの人生を左右をし



アメリカ・サウスキャロライナ州立ウィントロップ女子大学の美術教室にて

いだろうというので出品したら入選してしまっただ。当時最年少だということで下宿へ帰った朝日、毎日、読売の新聞社が待ちかねていてびっくりしましたね。

それから昭和四年に、中川紀元、東郷青児とぼくの三人で事務所を持った。そこで横光利一や宇野千代、阿部艶子なんかと出会いましたね。宇野千代は、けしはなぜ紅い」が時事新聞に一等で入選して文壇にデビューした頃で、見たこともないようなきものをきて絹の日傘をさして『銀座のモナミへお茶を飲みに行きましょう』なんて誘われると輝やくような気分でしたね」

★ニューヨークでPUREの絵を

「ぼくがニューヨークを選んだのは、ライフやマッコールなどを見ていて、アメリカの絵が好きだったからです。今やニューヨークには日本から八〇〇人の若い絵かきが生きています。現代を肌で感じながら明日への意欲をかきたてるそれがニューヨークですよ。朝六時に起ると七時迄散歩。七時から夜六時まで毎日毎日絵を描いている。最低一五〇号ぐらいのもの作ると思うから大きな絵なんです。得たものを積み重ねるんじゃないやなくて捨ててアカのたまらん絵をかきたい。今は、三つか四つの子供がハクボクで描くような絵を描こうと思ってる。Pureな絵を描きたい。上手な絵は描きたくないんです。職人とクリエーターの違いは、純心なものの世俗にわずらわされないものでなくては。ほんとのものがなくなってしまうのは一番いけない。だからぼくの信じているものに没入している。ニューヨークには現代の集積があるのでいつも刺激を受ける。現代に生きながら明日の環境に生きるということが大切です。絵かきの仕事場は魂のぶっつけるところ。死にもの狂いでキャンパスにぶっつける。生やさしいもんじゃない。男らしい戦いやと思うね」とニューヨークに生きる男の情念がほとばしる、エネルギッシュな高井画伯の言葉だった。

てるね。

ぼくの父が自動車会社につとめていて、高野山へ登山するための推出までの自動車会社をつくるために和歌山へ行き、その伊都中学へ移ったんだけど、家は神戸にあったので、夏休み毎に帰ってきて、信濃橋洋画研究所へデッサンに通ってね。岡上章、石丸、将積、大橋さんなどが花隈のカフェで、マラメルやボードレールやと議論しているのを聞いて芸術的な興奮を味ったし、当時、日文館（東京）から『新青年』が発刊されて、上筒井の薬局家だった横溝正史さんが活躍されていた、大正十三年頃ですね。だから神戸という町はぼくにとって、学校時代の懐しさもあるけれど、芸術的な雰囲気にもぎめた記念すべき町なんです。中学卒業して自分も絵かきになろうと東京へでて、多田繁治、九鬼一爾の三人で下宿に住み必死で頑張った二科展にぼくは、船の断面に飛行機が飛んだりしたモダンな三〇号の絵を描いたら多田がい

□ ずいそう

ヒッピー ハウスでの

三ヶ月

山崎浩平

カナダ——ヒッピー、広大な自然、自由な国、この国へ行くとうと決心したのは去年の万国博の最中であつた。

電気通信館に出演していた僕は、幾人かのカナダ館のミュージシャンの友人ができ、カナダで出演の世話もしてくれたので、チャンスとばかり県庁へパスポートの申請手続をした。

僕のスタイルがロングヘアーにヒッピースタイルのため、各所で困ったことが起きた。なかでも羽田空港では、待合所の多勢の人前で、手荷物の検査をされた。大きな希望と、かすかな不安は、太平洋を横切る機上では、かすかな希望と大きな不安に変わっていった。

はてしなく続く海原をながめて十一時間。バンクーバー空港に着いた。

ここでまた困ったことが起きた。イミグレーション(出入国管理局)で、待った。をくわされた。

一、航空券を片道しか持っていない。二、ロングヘアーでヒッピースタイルである。三、友人をたよって永住するかも知れない。四、わずかな滞在費しか持っていない。五、ビジネスビザはないが、どうも仕事をする様子

が見受けられる。

というのが足止めの理由だった。バンクーバー市内に限り滞在を認められ、二日後の審議会にかけられることになった。

チキショーノここまできて強制送還をされてたまるものか。何とか審議会までに帰りの航空券をつもりしなくては……。さっそく日本の兄に帰りの航空券の手配を頼み、モントリオールの友人には五百ドル程の送金を依頼するなど、打つ手は打った。

二日後、空港のイミグレーションで審議会が、三人の係官と書記の四人によつて行なわれた。聖書に「すべて真実のみを語ることを誓い、質問が始まった。途中、休憩の十分をはさんで、三時間以上も、この年齢になるまでのあらゆることを訊ねられた。「仕事をする気持は全くない」と偽っているが、日ごろ信じない神にひたすら祈るだけだった。

判決は一、保証金五百ドルを政府に預託する。二、帰りの切符を持っている。三、三カ月分の生活費(五百ドル)を所持する。四、居所を明らかにする等の条件で入



国を認められた。さらに一、には三カ月以内にカナダ国外へ出なければ預託金は没収するということだった。

一週間後に条件を全部満たし、僕の足は夢にまでみたモントリオールへ。

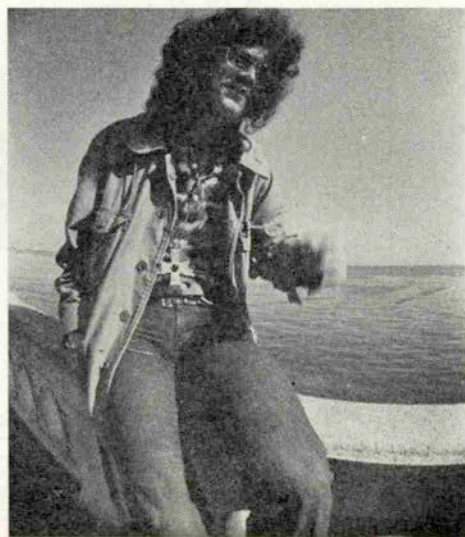
空港には三人の友人が迎えに来てくれていた。山の手（北野町の感じだが、もっと広大だ）にある三階建ての家の二階の一室に荷を解いた。その家は約七十年前に建てられたもので、月六百ドルくらいの家賃を何人かで借りている。ほとんどが金持ちの息子たちで、ホモのアレンとマリファナ、SLD等の売り子のピーター、アメリカ人で徴兵を逃げていたギターリストのデイズ、マリファナ所持で刑務所生活をしてきた元ドラマーのセルジオ、サラリーマンで日本通のクロウドもいた。女の子ではモデルのリサ、ディスクジョーカーのミッシェル、それにイギリスから夫と二人の子供を残してきたというダイアン。ここの「スター」で犬のミトラもいる。まったく変り者の集まりである。

ほとんどが日本人と話すのが初めてで、僕に大変興味を示していた。

日課は、朝はコーヒーとトーストなど、各自の好みでする。そして仕事に行く者は仕事に、家にいる者は掃除や洗濯、昼からは外をぶらぶらし、帰りにスーパーで食料品の買い出しをする。夕食は十時ごろ。とてもにぎやかだった。食事が済むとさらに三、四人の友人がどこからともなく来て、一階のリビングルームはニューヨークのリズムにのせて踊る者、マリファナで瞑想にふける者など様々だが、ここでは平和の楽園で皆は確かに生きていく。

一カ月もしたところ、FLQ（ケベック解放戦線）のテロ事件が起こり、カナダの労働大臣が殺された。関連してイギリス政府の高官が誘拐された。

平和で自由だったカナダは一変して自動小銃を持った兵隊が警戒に当たった。この時ほど日本の国の平和を感じたことはない。



モントリオールは、日本より冬の到来が早く長いので、積雪期が一年の三分の一もあるそうで、異国でながめる雪景色は、まるでおとぎの国にでも居るかのようだった。

そのうち僕は毎金、土曜を下町のジャズショップ「ブラックボトム」で演奏することになった。黒人のサックスとオルガンとのトリオである。

この頃三島由紀夫事件が新聞やTIME誌などで大きな反響を呼び、日本人は不思議な人種だということになり、僕も今まで以上に興味深い眼ざしで話しかけられた。これまでのカナダ人は、日本について、豊かな国、神秘的な国などと解釈していたからだ。

いよいよ三カ月の期限がきたので前途の事情から、美しい国カナダ、そして楽しかったヒッピーハウスとも別れることになった。

多くの人に会った。広い牧場、どこまでもまっすぐな道路、排気ガスなどウソのようなおいしい空気。そこに育った豊かでおおらかな人たち。

See you again、を何十人の人たちに言っただろう。そして僕はモントリオール空港に向って早朝の真白な雪を踏んだ。

（モダンロックカルテット・リーダー）

夏の緑の木陰で

海辺の潮騒の中で

トゥルンとスウィートな

缶入りババロアでございます。

6 個入 550円

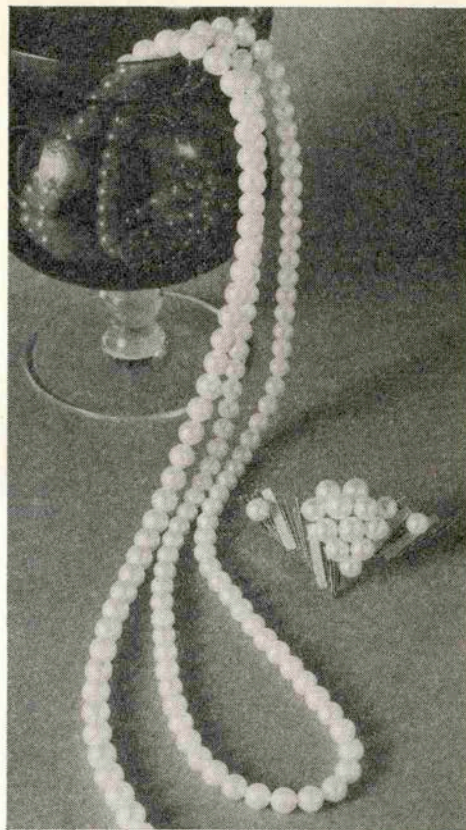


北欧の銘菓

ユーハイム・コンフェクト

■本 社・工 場 神戸市東灘区西宮町1 (市立美術館東隣) TEL 22-1164
■三宮センター店 神戸三宮センター街(洋菓子・喫茶・レストラン) TEL 33-2421
■さん ち 店 神戸三宮地下街スイーツタウン TEL 39-3558

Kitamura Pearls



世界の人々に愛される北村パール

北村真珠店

元町通2丁目60

TEL. 33-0072